二〇二四年度
入学試験問題

Ⅰ　国　語

（五十分）

注意事項

1　開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2　試験問題は23ページあります。
3　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4　解答用紙にマス目（例：□）がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。
5　終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受験番号					

問題は次のページから始まります。

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今は昔、貫之が土佐守（かみ）※になりて下りてありける（都から赴任した）程に、任果ての年、七つ八つばかりの子の、えもいはずをかしげなるを、限りなくかなしうしけるが、とかくわづらひて失せにければ、泣き惑ひて、病づくばかり思ひこがるる程に、月比（つきごろ）になりぬ（幾月か経ってしまったので）ればかくてのみあるべき事かは（こうしているわけにはいかない）、上りなんと思ふに、「児（ちご）のここにて何とありしはや（子供がここでこんなことをしていたなあ）」など思ひ出でられて、いみじう悲しかりければ、柱に書きつけける。

都へと思ふにつけて悲しきは帰らぬ人のあればなりけり

と書きつけたりける歌なん今までありける。

（『宇治拾遺物語』 一部改変したところがある。）

※ 土佐守になりて…紀貫之は土佐国（高知県）の長官として延長八年（九三〇年）から承平四年（九三四年）の四年間、都から土佐に赴任していた。

問一　――「えもいはずをかしげなるを、限りなくかなしうしけるが」の現代語訳として、最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　ひどく粗末で寂しげな様子の子を、ひどく哀れに感じて
2　すばらしく端正な顔立ちの子を、非常に不憫（ふびん）に思って
3　言葉にできないほどかわいらしい子を、この上なくかわいがって
4　とても明るく愉快な性格の子を、とても大切に育てて

問二　本文の和歌に込められた貫之の心情について説明したものとして、最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　都に戻らねばならないが、我が子の供養もできないまま土佐を去ることになってしまったという悲しみ。
2　我が子を失うだけでなく、慣れ親しんだ土佐国での生活も捨てなければならないという悲しみ。
3　我が子を救えなかった無力な自分を責めながら、失望感を抱えて都に帰らなければならないという悲しみ。
4　任期が終わって都へ戻ることになったが、子と一緒に帰ることは叶わなくなってしまったという悲しみ。

問三　次の説明の中から本文の内容と合致するものを一つ選び、番号で答えなさい。

1　貫之は土佐守として土佐に来たが、土佐に来てほどなくして貫之の子は死んでしまった。
2　貫之は生前の我が子を思い返すことが増え、早く土佐を離れて忘れようと決心した。
3　貫之は柱に和歌を書きつけて、その和歌は今でも残っているといわれている。
4　貫之は病で倒れるほど悲しみに暮れていたが、すぐに土佐を発つ日が来てしまった。

問四　『宇治拾遺物語』よりも後の時代に成立した作品として適切なものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　『枕草子』
2　『奥の細道』
3　『竹取物語』
4　『古事記』

【二】　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いつ迄、暗闇の中に愚図々々してもいられないので渋々庫裏のほうへ取ってかえすと、ちょうど庭下駄を突っかけて義兄の玄正が自分を探しにでようとしているところだった。薄ら明りの中に半面影隈取られて冷たく浮き出している尖った義兄の顔は、自分たちとは全く世界を異にしている人々だけの持つ厳しさだった。毎度々々のことながら取っ付けないものをそこに感じた。

「和尚様御食事じゃ。サ、早う給仕」

そうレイタンに（と次郎吉にはおもわれた）いい捨てて踵を返すと、侘びしい灯の流れているほうへ、真黒い衣を鋭くひるがえしながらとつかはと消えていってしまった。

時分時だというけれど、自分たちの住んでいた町家のようにお汁の匂いひとつただよってくるでもない。それも次郎吉には侘びしかった。

急いで和尚様のおイマへ入っていくと、もう誰かが運んできたのだろう、つつましくふた品ほどのお菜をのせた渋いろの塗膳を前に、角張った顔を貧血させて和尚様は、キチンと手を膝の上に、控えておられた。

「あいすみませんおそくなりまして……」

ちっとも小坊主らしくない軽いちょくな調子でいいながら、ピョコッと次郎吉はお辞儀した。

「……」

黙って和尚様はところどころヒビの入っている大きなお茶碗をヌイと差し出された。

……少しずつよそってそれを長い長いことかかって三杯。でもその三杯のすむ長い間、何ひと言和尚様は語りだされるでもなかった。すべてはただ黙々とした中に終始された。ほろ酔で阿父さんが木やりくずしか何か歌いだす我家の食膳が、そこに満ち漲る愉しい温い雰囲気がつくづくと次郎吉は恋しかった。しらぬ他国にいる寂しさにしんしんと身内の冷え返ることを感じた。

やっとお食事がおわると、

（もう片づけて）

という風に目で前のお膳を指された。

待っていましたとばかり、ピョコッとまたお辞儀をして立ち上がると、次郎吉は立ちのまま両手でお膳を持ってさっさと引き下がってきてしまった。

それからやっと自分たちの食事になった。

こちらは濛々と大きなお鍋から湯気が立って、傍目にはひどく美味しそうだったが、取柄といえば温いばかり。今夜も下らなく仇辛いお雑炊だった。（とてもしおからい）

お菜はひね沢庵が三切れずつ。

でも次郎吉を除く皆はフーフー吹きながら、幾杯もお代りをしては啜り込んでいた。幾度かジロリジロリこちらを睨むようにしている義兄の目を感じながらも次郎吉は、どうしてもたべることができなかった。

1 二杯――やっとの思いで二杯だけたべた。

それから火の気のない本堂へ坐って、永いこと皆とお経を誦んだ。

観自在菩薩、深般若波羅蜜多……。

般若心経だった。c 霜夜のオウライに立ちつくしているようキーンキーンと痛く膝頭を凍らせながら次郎吉も、皆のあとへ従いてそのお経をモグモグ口の中で誦んだ。あまりの寒さが、風花落ちかかる夜更けの街から街を慄えていく寒念仏の辛い境涯が、そのまましきりにいま自分の上にあてはめて考えられてきた。いつかお経は上の空になった。そのとき皆のお経の声がひとしお耳許でグワッと波打って高まってきて、ポトンと絶えた。おしまいだった。

そうしてやっと各自が寝間へ引き取るのだった。次郎吉は役僧たちの寝る部屋が一杯だからとて、庫裏の脇の長四畳のようなところへ寝かされた。

冷たいゴツゴツした夜具蒲団。

枕許で惨めに一本、燈芯の灯が薄青く揺れていた。

……何だろうあの和尚様のお菜ッたら。

いよいよ募ってきた夜更けの寒さにガタガタ身体中を慄わせながら床の中で次郎吉は、しきりに最前の和尚様の食事のことを情なく思い返していた。

ふた品ほどの皿の上――ひとつは真黒い粒々でもうひとつは茶っぽいドロッとしたものだった。

浜納豆に金山寺味噌、たしかにそうと次郎吉は睨んだ。

どちらも美味しくない、およそ次郎吉の［ X ］の好かないたべものだった。しかもここへきてもう三晩、たいてい毎晩和尚様はあのお菜だった。

他人事ながらあんなお菜ばかりたべていなければならない和尚様が気の毒で気の毒で仕方がなかった。

でも……。

和尚様よりもこの俺たちのお菜ときたら、またもっとひでえや。

最前の仇辛い雑炊の舌ざわりを、悲しく次郎吉は舌の上へ喚び戻していた。何とも彼ともつきあい切れない味だった。味も素ッ気もないとよくいうけ

れど、まだそのほうがいい、味のあるだけいっそう情ないシロモノだった。[d]

ほんとに何て雑炊なんだろう、ありゃ。

阿父さんがよく宿酔のとき、深川茶漬といって浅蜊のおじやみたいなものをこしらえ、その上へパラリと浅草海苔をふりかけたのをよくお相伴させて貰った。けれどあれとこれとじゃうんてんばんてんの違いがあらあ。

ひでえにもひどくねえにも、よく仲間がやる落語に「万金丹」てのがあって、道に迷った江戸っ子二人、山寺へ一夜の宿を借りると、世にもキミョウな味の雑炊をたべさせられる。[e]

しかもときどき舌へ絡みつくものがあるので、

「何ですこれは」

と和尚様に訊くと、

「藁だよそれは」

「エ、藁？」

「ウム」

ニッコリと和尚様は笑って、

「お前その藁をたべるとお腹ン中がよく暖まる」

「壁じゃあるめえし」

というくすぐりがある。[※1]

何のことはない、その藁入りの雑炊もかくやとばかりのここのお寺の雑炊だ。

とすると俺たちもおっつけ壁になる口か。[ア]

いや、なるかもしれない。

ほんとに——ほんとにこんなお寺の生活なんて、しんからしんじつつまらなくって、壁も壁も大壁みたようなものだろう。そうしてこの自分もまた、次第にその大壁の中へ塗りこめられていく一人となるのだろう。

そう、まさにそれに違いない。

……そのように考えたとき次郎吉は、にわかに父圓太郎がよく高座でつかう十七文字がゆくりなくもおもいだされてきた。[イ]（突然）[※2]

エーエーとあれは、む、む……む……そうだ、「武玉川」だ、たしかそういう発句の本だっけ、その中の句を引事にしちゃ、阿父さんこういったんだっけ、

「この蜆、壁で死ぬとはおもうまい」って。

あの時分は何の気なしに聞き流していたけれど、今になると思い当るいい句だ、たしかに。

「壁で死ぬとはおもうまい」か。

その通り、その通り。

2

とするとこの俺はさしずめ蜆か。

ウム、いかにも俺、小っこくて江戸前だから、業平蜆ってところだろう。

……ふッといま次郎吉の心に、青々と水美しくこがれている業平あたりの春景色が、広重えがく江戸名所絵のよう蘇ってきた。

早春の空あくまで青く、若草萌えている土手の下、そこにもここにも目笊片手の蜆取りの姿が世にも鮮やかに見えてきた。

臥龍梅から小村井かけて、土手ゆく梅見客も三々五々と目をよぎった。どの男も、どの女もみんな瓢箪を首にかけ、ホンノリ頬を染めていた。

……しかもその景色は、こうした寺方の墨一色の世界とは比ぶべくもなく多幸な多彩なこの世ながらの大歓楽境のようおもわれないわけにはゆかなかった。いまの環境がいっそう何とも彼とも取り返しの付かないもののよう、世にもクサクサと考えられてきた。

ああ俺のような江戸前の生一本の業平蜆が、こんな※3抹香臭い荒寺の壁の中で死んでしまうなんて。

いやだ……いやだ……俺いやだ……いやだったらやだやだやだ。

まるで手籠めにでもなるのを阻むもののように床の中で次郎吉は、必死になって身悶えした。バタバタ手足を振り動かした。いつ迄もいつ迄も繰り返した。繰り返してはまた繰り返していた。

（中略）

翌朝。

晴れているのに少しも日のさし込んでこないガランとした冷たい本堂の真っ只中に、次郎吉はたったひとり坐らされていた。

お経文の稽古だった。

庭先のほうの明るく晴れて見えるだけ、いっそう身の周りの一切が寒々と凍えていた。

「……」

昨夜みんなのあとへつづいてしどろもどろに誦んだ般若心経を、早く覚え込んでしまわなければならない。

「エヘン」

誰にともなく咳払いした。そうして目の前のお経文へと目をやった。

「観自……観自……在菩薩」

読みかけてまた、

「観自……観自……観自観自」

あとの観自は、ことさらに二つ重ねていった。

かんじ……かんじ……観自ではなく、かん治。宗十頭巾に十徳姿、顎鬚白い、好々爺然とした落語家仲間のお稽古番、桂かん治爺さんの姿が、ヒョロヒョロと目の前に見えてきた。

「いけない」

あわてて次郎吉は、首を振った。俗念を払おうとしたのだった。

「観自在菩薩、深般若波羅蜜多を行ずる時、五蘊皆空なりと照見して……」

急いでここまで読み下して、素早くさらに次の言葉へと読み移った。

「一切の……一切の苦厄……苦厄……」

九百九十の寺々に、※4きのう剃ったも今道心……苦厄という言葉がそのまま九百へ連想を走らせてきた。おととい剃ったも今道心、ただ道心では分り申さぬ、と同時にこんな張りのある※5訥弁の声いろが、あとから耳許へ聞こえてきた、木の葉の合方、山嵐や谺の鳴物も聞こえてきた、扇で半面隠して一生懸命声張り上げている小勝師匠の高座姿さえマザマザとして見えてきたのだった。

グオーン。

そのとき遠くの位牌堂のほうへ行く道で、誰かが鐘を鳴らしていった。それすら時にとっての※6本釣りと聞こえた。

3

「紀の国屋」

思わずこういってしまって、ギョッと口を押さえた。あわてて辺りを見廻した。幸い、誰もいなかった。急いで次のお経へかかった。

（中略）

音を上げて次郎吉は経文を伏せてしまった。妄念を払うがごとく、欄間を見た。

張りめぐらされている赤地錦へ、蜿々として金龍が一匹蟠り、それが朝風に戦いていた。
「……」
その唐風の暖簾のようなものの一番端に、吹抜亭さんへ、ひいきより――という文字を、アリアリと幻に見た。
「いけない」
ハッと次郎吉は眼を閉じた。
やがて、ひらいた。
目を逸らすように天井を見た。
貧乏寺でもさすがにこればかりは金色燦爛とした天蓋が、大藤の花の垂るるがごとく咲き垂れていた。
その天蓋に、今度は高座の上から吊されているあの八間の灯を感じた。
いけない。
またまた次郎吉はしばらく目を閉じた。
そして、ひらいた。
慈愛を含めている正面の阿弥陀さまのお姿が、その左右のあかあかと燃えている大蝋燭が、次郎吉のようなお寺嫌いのものにも目に入ってきた。
「観自在菩薩、深般若波羅蜜多……」
ここぞとお経文に頼ろうとした。
……が甲斐なかった、二本の大蝋燭はたちまち高座のそれにそっくり見え、もったいないが鎮座まします阿弥陀さまは、親父の圓太郎が師匠の二代目三遊亭圓生の身振りうれしき芝居噺の画面の姿を髣髴と目に躍らした。（年長の演者への掛声）親玉ァとさえ、また叫びたかった。
「なんまいだぶなんまいだぶなんまいだぶなんまいだぶ」
あまりのことに自分が情なくなってきて次郎吉は、急にカラリと明るい調子でお念仏を唱えだした。あとからあとから尽くるところなく唱えだしたのだった。
「……」
たまたま廊下を、義兄玄正が通り合わせた。
覚えろといった般若心経ではないけれど、心を空の念仏三昧。ではやっと落語家たることをあきらめてくれたか。

秋の霜のような烈しい顔をそっと綻ばして喜ばしさに通りもやれず玄正は、そのまま廊下に立ち停まって耳傾けていた。
「なんまいだなんまいだなんまいだなんまいだなんまいだなんまいだなんまいだなんまいだなんまいだなんまいだなんまいだ」
明るいお念仏の声は、いつ迄もいつ迄もつづいた。果てしなくつづいていった。
とおもううち、
「……おい婆さん、飯が焦げるよなんまいだぶなんまいだぶなんまいだぶ」
いきなり次郎吉は爺臭い声をだして、
「おい誰だい赤ん坊を泣かすのは……うるさくっていけねえ、気を付けろよなんまいだぶなんまいだぶ、アオーイ鰌屋、いくらだ一升、ウ、高え高え負けろ、もう二文負けろィ、あれ因業だな、ヤイ負けねえとぶンなぐるぞ、ア負けたか感心なんまいだぶなんまいだぶ、オイ婆さん、早く笊を出してやんな、なんまいだぶなんまいだぶなんまいだぶ、何、因業な割には安い鰌屋だって、ウ、そいつァよかった、じゃすぐお味噌汁の中へ入れちまいねえ、なんまいだぶなんまいだぶなんまいだぶなんまいだぶ、どうだ入れたか皆、なんまいだぶなんまいだぶどんな具合だよ鰌は、なんまいだぶなんまいだぶ、鰌、皆白い腹だして死んじまったって、態ァ見やがれ、なんまいだぶなんまいだぶ……って。これじゃ何にもなりやしません」
ここまでトントンとひと呼吸に喋ってきて始めてホッと我に返ったように、
「ヘイお馴染の小言念仏、ちょうどおあとがよろし……」
いいながら何気なく見た廊下には、
「ア！」
さながら入道雲のよう渋面つくった義兄玄正がニュニューッと一杯に立ちはだかっていた。
「い、い、いけ……」
このまま心臓の鼓動が止まってしまうかとばかり次郎吉はおどろいた。目を白黒した。口をモグモグした。法返しが付かないてのはこのことだろう、自分で自分のからだのどこに何がどうあるか分らないほどだった。夢中でいたり立ったり坐ったりしていたが、やっぱりいつ迄もいつ迄もジーッと立ちはだかったまま睨み付けている義兄の手前何とも型がつかなくなると、てれかくしにまた取って付けたような声音で、
「観自……観自……観自在菩薩」
「い、いい加減にしろ」
5 堪り兼ねて玄正が、ピューッと握り拳固めて、荒々しく飛び込んできた。その握り拳が、次郎吉には大きいとも何とも畳半畳敷くらいに見えた。

（取り返しがつかない）

「ご、ごめんなさい」
まだ撲(なぐ)られないうちに次郎吉は目を廻(まわ)していた。

（正岡容『小説　圓朝』　一部改変したところがある。）

※1　くすぐり…話術や演芸などで客を笑わせようとすること。
※2　高座…落語などを行う寄席(よせ)で、演者が芸を演ずる場所。
※3　抹香臭い…仏教的な感じのするさま。
※4　きのう剃った〜…江戸時代後期に流行した口説節(くどきぶし)「石童丸口説」の一節、歌舞伎などでも用いられる。
※5　訥弁…話し方が滑らかでないこと。
※6　本釣り…演芸の効果音、凄みのある場面や見得を切る場面で鳴らす。

問一　――a～eに相当する漢字を含むものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

a　レイタン

1　未知の場所をタンサクする。
2　メダカはタンスイで生きる魚だ。
3　相手のコンタンを読みきれない。
4　生きることはカンタンではない。

b　イマ

1　祖母の家はイゴコチがよい。
2　違う地方にイジュウする。
3　セイイをもって謝罪する。
4　常識のハンイを超える。

c　オウライ

1　書類へのオウインを求められる。
2　ジュウオウムジンにかけまわる。
3　インガオウホウと言わざるを得ない。
4　長生きをしてダイオウジョウをとげた。

d　シロモノ

1　シロウトの域を超えた技術を持つ。
2　被害者はミノシロキンを要求された。
3　戦国時代のシロアトに思いをはせる。
4　マッシロな雪に心をあらわれる。

e　キミョウ

1　キチョウな文化財を見る。
2　キショウ衛星を打ち上げる。
3　キカイな風景に驚く。
4　母のキゲンをそこねる。

問二　――ア・イの語句の文中の意味として最も適するものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

ア「おっつけ」

1　いつも、毎回　　2　思いがけなく、不意に

3　そのうち、まもなく　　4　きっと、かならず

イ「にわかに」

1　巧みに、しっかりと　　2　ゆっくり、徐々に

3　いい加減に、無理に　　4　突然に、急に

問三　X に入る漢字一文字を答え、「気に入らない」「好感がもてない」という意味の、一般的には「X が好かない」という形で用いられる語句を完成させなさい。

問四　――1「二杯――やっとの思いで二杯だけたべた」とあるが、このときの「次郎吉」の心情の説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　自分にだけ厳しい義兄「玄正」に慣れない給仕をやらされ、口に合わない料理を無理強いされる自分を情けなく感じるものの、この寺院以外に行くあてもないので無理をしてでも玄正の意に沿って食べようという思い。

2　今まで暮らしていた落語の世界とは正反対の仏教の世界につまらなさを覚えて、美味しい料理すら食べる気が起きないくらいうんざりしていたが、義兄の「玄正」の強いまなざしにおびえてしぶしぶ食事をしようという思い。

3　他の僧たちが美味しそうに食べている料理よりも和尚様の料理を食べたいという欲望を義兄の「玄正」に見すかされ、叱られるようににらみつけられたので、内心では反感を持ちながらも今は食べるしかないという思い。

4　今まで親しんでいた空間とはまったく異なる慣れないお寺の中で、料理自体も自分の口には合わず食べる気は起こらなかったが、義兄「玄正」の厳しい視線を感じて周囲の人々と同様に食事をするしかないという思い。

問五　――2「とするとこの俺はさしずめ蜆か」とあるが、この場面に関係する説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　「この蜆だけは壁の材料として砕かれて死んでしまうとはとても思われない」という意味の川柳から、今はお寺の小坊主としてつらく悲しい思いをしている自分だが、壁の材料になどならない江戸生まれの小さい業平蜆と同一視し、いつまでもこのままでは終わらないという強い気持ちを胸に秘めている。

2　「水辺に生きる蜆は、自分が壁を作る材料として死ぬとは思わなかったであろう」という意味の川柳から、お寺の小坊主として、そしてそのまま僧侶として生涯を終えるであろう自分の境遇が、壁の材料に使われる蜆の様に、まったく場違いかつ予想外であると自分と蜆を同一視し、深く感じ入っている。

3　「食べ物の蜆が藁と間違えられて壁の材料にされて死ぬとは思わなかったであろう」という意味の川柳から、何かの間違いでお寺に預けられて、この先もつまらない苦労をし続けるであろう自分の境遇と、壁の材料に間違えられて無意味に殺されてしまう蜆を同一視し、強い怒りと悲しみを抱いている。

4　「水の中の生物である蜆が、どうして建物である壁に投げつけられて死ぬのだろう」という意味の川柳から、義兄「玄正」によってお寺のようなつまらない場所に閉じ込められ、そのまま生涯を終えるであろう自分の境遇を、理不尽にも壁に打ちつけられ死を迎える蜆と同一視し、恨みをつのらせている。

問六　――3「『紀の国屋』思わずこういってしまって、ギョッと口を押さえた」とあるが、この場面に関係する説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　大好きな演芸の世界に脱線しないように真面目にお経を唱えようとはするものの、結局は演芸の世界に没入し、あまつさえ掛け声まで無意識のうちに口に出してしまった自分の性情にひどく驚くとともに誰かに聞かれてはいなかったかと心配している。

2　誰かに聞き耳を立てられていることを恐れ、小声で落語をしゃべっていたが、ついつい興がのってしまい思いのほか自分が大きな声で落語を演じていることにふと気づき、聞かれたのではないかと恐れるとともに、こんな自分の現状に不安を抱いている。

3　演芸のことを連想しないように注意をして読経していたはずなのに、結局演芸の世界に想像を広げたうえに観客の掛け声まで演じてしまう自分に気づき、自分が本質的に演芸人であると理解できた満足感とともに仏教修行への疑いも心に芽生えている。

4　義兄にうながされてお経を熱心によんでいたはずなのに、近くで鐘が鳴ったことをきっかけに、唱えていたお経が演芸の話に変化したことに気づき、自らのふがいなさを痛感するとともに自分に期待をしている周囲の人々に申し訳ないと思っている。

問七　――4「小言念仏」とあるが、この説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　「次郎吉」が話す「小言念仏」は真面目に念仏を唱えているつもりの本人と周囲の冷ややかな対応の差が面白い落語であるが、念仏を唱えつつドジョウを値切り、暴力を振るおうとする人の意地の悪さや浅はかさを風刺しており、「次郎吉」の和尚様への気持ちを反映しているようでもある。

2　「次郎吉」が話す「小言念仏」は念仏をきちんと唱えず周りのささいなことにばかり注意がいく人間の愚かさを笑いものにした落語であるが、これは同時に閉ざされた社会の息苦しさやタテ社会の理不尽さの風刺となっており、小坊主である「次郎吉」の内面を反映しているようでもある。

3　「次郎吉」が話す「小言念仏」は一心に念じるべき念仏のさなかに世俗的な小言がはさまる点におかしさを感じさせる落語であり、ドジョウを煮殺す描写などは仏教の教えと真逆であることからいい加減な信心への風刺を読み取ることもでき、「次郎吉」の内心を象徴しているようでもある。

4　「次郎吉」が話す「小言念仏」は一生懸命に唱えなければいけない念仏をなおざりにする民衆を面白おかしくスケッチした落語であるが、飯や味噌汁、ドジョウ等の現在よりも貧しい当時の食料事情を風刺するとともに、お寺の食事に対する「次郎吉」の不満を象徴しているようでもある。

問八　――5「堪り兼ねて玄正が、ピューッと握り拳固めて、荒々しく飛び込んできた」とあるが、このときの「玄正」の心情を、その理由とともに五十字以内で答えなさい。

問九　本文の内容の説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　「次郎吉」がしぶしぶお寺で小坊主をしていることを知る他の僧侶たちは、「次郎吉」の態度に反感を持ちつつも同情もしており、その心情がおいしくはないが温かいお粥に例えられている。

2　お寺での日常と「次郎吉」の連想する演芸の世界を交互に描写することで、落語家になりたいという強いおもいを抱いている「次郎吉」の内面をうまく読者に理解させる表現となっている。

3　作中で多用される「…」は言葉にならない不満を胸に秘めている「次郎吉」の心情をあらわすとともに、大人の意向に人生を左右されてしまう若年者の悲哀と言葉のつたなさを強調している。

4　「次郎吉」がたびたび連想する隅田川の風景は、茶色一色に塗りつぶされたお寺の冷たく人気のない雰囲気と対比するために、あたたかく色鮮やかに、人間も生き生きと描写されている。

5　全編にわたり改行を多用することによって、「次郎吉」自身の千々に乱れる心情とともに、そんな「次郎吉」の行動をいつも心配して見ている「玄正」のあせりとまどう気持ちを表している。

【三】 二〇二〇年に出版された、『ポストコロナ期を生きるきみたちへ』という本に収録されている以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ところで、ここ10年程の間、学問の世界では「ポスト・ヒューマン」という概念・言葉がキーワードになってきていました。これは、近代＝人間中心主義（ヒューマニズム）の時代が終わったという時代認識を示しています。

前近代が神中心の時代だったのに対して、近代は人間中心の時代である。人間を世界の中心に据えたからこそ、「神をも畏れぬ」仕方で自然に手を入れられるようになり、自然の法則を解明してそこにカイニュウ[a]する技術が飛躍的に発展してきました。その結果、私たちの日常生活の有り様は、次々に激変してきたわけですが、多くの場合、これらの変化は「便利で安全で快適になった」ととらえられています。

こうして技術発展の万能性がシンポウ[b]されるようになると、今度は世界の中心を占めるのは人間ではなく科学技術である、ということになってきます。こうした考え方の典型が、AI[※1]（人工知能）は人間を超えるといったような議論です。一部の論者によると、人間がやってきたさまざまな知的活動は、AIによってことごとくとって代わられるのだそうです。もう人間は「世界の中心」ではない――これが「ポスト・ヒューマン」という言葉の核心にある考え方です。

しかし、「ポスト・ヒューマン」は同時に、極端なまでの人間中心主義（ヒューマニズム）でもあるのです。なぜなら、科学技術をつくり出すのはもちろん人間なのですから、科学技術が万能だとすれば、それは人間の万能性を意味するからです。

ただし、「ポスト・ヒューマン」を脱人間中心主義と見るにせよ、究極の人間中心主義と見るにせよ、ひとつのことは確実に言えると思います。それは、「ポスト・ヒューマン」とは、「他者としての自然」が消滅した状況を指している、ということです。ここで言う「他者」とは、「自分の思う通りにはどうしてもならない相手」というような意味だととりあえず了解してください。近代の人間中心主義は、自然の他者性をどんどんシュクゲン[c]してきました。たとえ自然の成り立ちにわからないところがあっても、それは「まだ」わからないにすぎない（＝いつか必ずわかる）ものとしてとらえられるわけで、近代自然科学は自然の他者性を原理的には消去しているわけです。

（中略）

私の考えでは、新型コロナによる危機が吹き飛ばしたのは、こうした「人間の開発した技術は世界の謎を解明し尽くして、思うがままに自然を改変することができる」といった観念ではなかったでしょうか。繰り返しますが、感染症に対する人類の知識が限られていることには、驚きを禁じ得ません。新型コロナ危機に促されて、私も専門家が書いた本を読むなど感染症に関するにわか勉強を少々してみましたが、そこですぐにわかったことは、「感染症というものはよくわからないものだ」ということでした。

人類が意図的な努力によって撲滅できた感染症は天然痘ただ一つにすぎず、ペスト、エイズ、結核、エボラ等々の多様な感染症の問題は、画期的な薬やワクチンの開発によってその被害を食い止めることができるようになったものも多いとはいえ、根本的には何ら解決されていないのです。気が遠くなるほどの長い歳月にわたって、多くの優れた知性が時に自らの命を危険にさらしながら感染症の脅威と戦い、その正体を見極めようと努力を重ねてきたにもかかわらずいまだにわからないことだらけで、ある感染症の流行が収束した理由もよくわからないものがほとんどなのです。例えば、約１００年前に起こったインフルエンザのパンデミック、いわゆるスペイン風邪（１９１８～１９２０年）は、全世界で１７００万人から５０００万人もの命を奪ったと見られますが、これが収まったのも集団免疫の獲得によってであろうということまではわかっていますが、なぜそのタイミングで、どのようにして収束したのか、またウイルスの起源も、いまだわかっていません。

そして、今回の新型コロナウイルスの登場です。いま世界中の専門家がこのウイルスの研究に取り組んでいますが、[1]一筋縄ではいきません。なにせウイルスは次々と変異し、強毒化することもあれば、弱毒化することもあります。ですから、対処として何が正解であるのかも一概には言えません。ロックダウンのために、欧米ではＧＤＰが30％以上も下落しました。日本のＧＤＰも30％近い下落をマークしました。それほどまでに私たちは活動を縮小させて新型コロナウイルスに打ち克とうとしてきたわけですが、このやり方が正しかったのかどうかもよくわかりません。仮に新型コロナの致死率がそれほど上がらないならば、経済縮小のために自殺に追い込まれる人の方が多くなってしまうかもしれません。もしもそうならば、活動の縮小などしない方が正解だったということになります（現にスウェーデンはそのような判断を下して実行しています）。ですが、私たちは、あまりにもわからないことが多すぎて、「仮に」とか「もしも」とかいったかたちでしか考えられないのです。また、致死率を予測することもできなければ、ロックダウンがもたらす経済的苦境による自殺者の数も予測困難です。いわんや、それらを比較することなどできるはずがありません。後遺症の重症度や発生率もまだわかっていません。安全なワクチンができるかどうかも、まだわかりません。本当にわからないこと尽くしです。

こうした現実は、[2]「私たちは自然を征服した」という「ポスト・ヒューマン」の観念を吹き飛ばすに十分なものではないでしょうか。ＡＩが人間の思考を無用のものとする日を想像するよりも、ウイルスの変異メカニズム[※2]や、新型コロナウイルスをきわめて危険な感染症としている理由であるところの人間の免疫系の過剰反応（サイトカインストーム）の発生メカニズムを解明することの方が、はるかに重大な課題であることは言うまでもないでしょう。

もっと言えば、新型コロナによる危機が訪れる前、私たちはなぜ、「科学技術による自然の征服」という[3]妄想にとり憑かれていたのか、立ち止まって考えてみるべきではないでしょうか。私たちはいま、[4]常識に引き戻されたのです。

技術の発展は社会の在り方をどんどん変えてゆく、すなわち社会の在り方はその社会の持つ技術によって決定される、という考え方は「技術決定論」

と呼ばれます。新聞記事などでよく見かける「ＡＩの進化によって社会は激変する！」といった考えは、典型的な技術決定論です。技術決定論は、技術を独立変数として設定し、社会の在り方をその関数としてとらえます。そして、技術は進化し続けるものと想定されます。ですから、「ポスト・ヒューマン」の観念も技術決定論の一種、そのかなり極端なヴァージョンであると言えるでしょう。技術は進化し続けて、人間に成り代わって世界の中心になると言うのですから。

甲

つまり、利用可能な技術のうち、どの技術が用いられ、どの技術が用いられないかを決めているのは、その社会の在り方なのです。このことは、技術の発展にも当てはまります。どんな技術が盛んに発展し、どんな技術が発展しないのかを決めているのは、技術そのものではなくて、その技術を利用する社会の在り方なのです。技術決定論の主張とは逆に、社会の在り方が独立変数であり、技術はその関数なのです。

もちろん、技術が社会の在り方に影響することは多々ありますが、それはその社会の中にすでに存在していたもの、すでに存在している傾向に刺激を与え増幅させる、ということにすぎません。身近な例を挙げるなら、ＳＮＳは衆愚制を生み出すのではなくて、衆愚制を活気づけ拡大するのです。

技術と社会のこうした関係が転倒して、技術が社会の在り方を決定しているように見えるのは、まさに社会が現実をそのように見せるような在り方をしているからです。そしてそれは、資本主義社会に特有の現象であると考えられます。というのは、資本主義社会では生産力を絶えず向上させることが至上命令になっているからです。「もう十分」とか「ほどほどにしておこう」といった常識に基づく判断は、資本主義社会では通用しません。生産力・生産性を際限なく上げ続けなければならないメカニズムが、ビルトイン[※3]されているからです。

ですから、より高度な生産性の実現を求めて、技術革新もここでは際限のないものとなり、それがもたらす社会の変化もカンダン[d]なきものとなります。しかし、こうして技術革新が社会の在り方を変え続けているように見えるけれども、本当のところは、そうした絶えざる革新を求めているのはその社会の在り方の根本（すなわち、資本主義社会であるという社会の在り方）なのですから、その根本が際限なく強化され続けているだけのことなのです。あらゆるものが変化しているように見えて実は何も変わってはいません。

このように考えてみると、「ポスト・ヒューマン」[5]なる観念が、資本主義の過剰なまでの高度化の産物だということは明らかであるように思われます。

（中略）

してみると、新型コロナウイルスの大流行によって、私たちは大いなる気づきの機会を与えられたと言うべきではないでしょうか。感染症のメカニズムについて、また私たち自身の免疫系のメカニズムについて、人類がまだ知らないことは山ほどあるのです。そしておそらくは、私たちがそれについてまだ知らないということさえ知らないことも、数知れずあるに違いないのです。「自然の他者性」は、強烈なインパクトを伴いながら、私たちの許に

返ってきました。私たちの社会が、人類の福祉と幸福のために、どのような知識や技術を発展させるべきなのかということが、あらためて問われているのです。

思えば、技術が社会を従わせるのではなく、社会が技術をコントロールすべきだという教訓を、私たちは3・11東日本大震災による福島第一原発事故で叩き込まれたはずではなかったでしょうか。

ドイツは、かの事故を受けて原発を継続するかどうかを議論するために「脱原発倫理委員会」を組織しました。倫理委員会のメンバーは、科学技術界や宗教界の最高指導者、社会学者、政治学者、経済学者、実業界などから選ばれ、原子力の専門家は排除されました。なぜなら、原子力業界の人間はどうしても利害関係者であるからです。この委員会は、原発はもうやめるべきだと結論し、アンゲラ・メルケル独首相はこの提言に従うかたちで脱原発の方針を決定しました。ここには、技術の利用の在り方は社会の意思によって決定されなければならない、という確たる思想があります。

翻って事故当事国である日本はどうでしょうか。あらゆる角度から原子力技術の得失を検討し、広範な国民の関心と議論を呼び起こそうなどといった国家的試みなどカイム[e]です。原発という途方もなく危険であるものの、同時に途方もなく便利である技術の利用を押し通すために、社会を腐敗させる行為（原発マネーによる立地地域の買収、反対者への脅迫、御用学者の育成、マスコミの買収等々）が数限りなく行なわれてきました。こうして、技術に[6]隷属し、技術によって歪められた廃墟のような無惨な社会が出来上がりました。そして、あの事故を経て、ドイツから手本を見せられてさえも、技術と社会の関係の在り方に対して反省することもできていないままなのです。

このような具合ですから、相も変わらず、「AIが！」「キャッシュレスが！」「スマートシティーが！」、と新技術をめぐる大騒ぎが続いています。それらを受け入れねばならないとされているのは、技術発展は決して止められない宿命だと思われているからです。そして、宿命である以上、私たちが本当にそれらを求めているのかどうかは決して問われません。それは言い換えれば、私たちは自分たちがどんな幸福を求めているのかを知ろうとしていない、ということです。そして、何が自分の幸福であるかを考えない人間とは、虚しい人間[7]です。

（白井聡「技術と社会――考えるきっかけとしての新型コロナ危機」　一部改変したところがある。）

※1　AI…artificial intelligence（英）の略。学習、推論、問題解決、判断、知識表現など人間の能力に近い機能を持ったコンピュータによる情報処理システム。

※2　メカニズム…物事のしくみ。

※3　ビルトイン…そのものの内部に持つこと。内蔵すること。

問一　――a～eのカタカナを漢字に直しなさい。

問二　――1・3の語句の文中の意味として最も適するものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

1「一筋縄ではいきません」

1　手段が尽きてしまっています
2　善悪の問題となる次元に収まりません
3　尋常なやり方では思うようになりません
4　普通に考えられる程度をはるかに越えています

3「妄想」

1　悪意やたくらみを秘めて考えたこと
2　経験していない事柄などを推し量ること
3　心に思い描いた、現実には存在しないこと
4　とりとめもなく想像した、根拠のないこと

問三　――2「私たちは自然を征服した」とあるが、これをくわしく述べた部分を、本文から四十五字以内で抜き出し、その最初の五字を答えなさい。

問四　――4「常識」とあるが、この内容として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　新しく開発された技術によって、これまでとは異なった行動様式が多々生じている。
2　人間が知性をどれだけ働かせても、世界には人間が理解できないことが多く存在する。
3　技術は留まることなく進化を続け、いずれ人間の知性にとって代わって世界の中心になる。
4　人間が技術を開発するのだから、技術がどれほど進歩しようとあくまでも世界の中心は人間である。

問五　甲　に当てはまる文章として最も適するものを、次の文を並び替えて作り、その順番に従って記号を答えなさい。

ア　なぜなら、江戸時代の人々は、正確な時間を知る必要のある生活を送っていなかったからです。
イ　しかしそれは広く使われることはなく、好事家（こうずか）の珍しい玩具として流通しただけでした。
ウ　なぜなら、社会はその時々に利用可能な技術をすべて利用するわけではないからです。
エ　工業社会化しない限り、分単位の正確な時間を知ることなど全く必要ではないのです。
オ　例えば、日本の江戸時代には、正確に時を刻むことのできる時計がすでにありました。
カ　しかし、この考え方は真実ではありません。

問六　――5「『ポスト・ヒューマン』なる観念が、資本主義の過剰なまでの高度化の産物だ」とあるが、これを説明したものとして最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1　生産技術の向上を永続的に求める資本主義の発展に伴い、技術が人間や社会を従属させているかのような意識を人々は抱くようになったということ。
2　技術革新を求める資本主義の発展に伴い、技術の変化と社会の在り方とは不可分であり相互に影響しあうという認識が人々に広く定着したということ。
3　資本主義の進展によって更なる技術革新が追求された結果、人間では制御できない技術が生じたため、人々は技術が世界の中心になると考えるようになったということ。
4　一見すると技術革新が社会を変化させるようで、実は資本主義の進展という社会の変化が技術革新を求めているという実情を、人々が意識するようになったということ。

問七　――6「技術に隷属し、技術によって歪められた廃墟のような無惨な社会」とあるが、このような社会と対極にある社会を四十五字以内でわかりやすく説明しなさい。

問八　――7「虚しい人間」とあるが、これについて説明した以下の文の［　　］に当てはまるものとして最も適するものを後から選び、番号で答えなさい。

虚しい人間とは、何が自分の幸福であるかを考えず、［　　］。

1　経済的利益を優先させるあまり、人類全体が対処すべき問題さえも技術で解決しようとする存在
2　人間の万能性と永続的な資本主義社会の発展とを信じて、技術革新を選択的に追求していく存在
3　全ては技術で思い通りになると考え、技術がもたらす利便性や経済的利益にばかり注目する存在
4　快適に暮らすためにはためらわずに自然に手を加えようとする、人間を中心に物事を考える存在

問九　本文を読んで生徒たちが感想を述べあっている。本文の趣旨を正しく理解して感想を述べている生徒を一人選び、番号で答えなさい。

1　生徒A：筆者が今回のコロナ禍を話題にしてくれたから、結局人間は自然を支配出来ていないことがわかりました。
2　生徒B：コロナの流行が私たちにもたらした災難の中で一番なのは、コロナを私たちの技術では治せないということです。
3　生徒C：新技術をめぐる私たちの態度に対して、筆者は資本主義社会に生きる以上仕方がないという思いを抱いています。
4　生徒D：私たちに人間や社会のあるべき姿を考えてほしいから、身近な話題をかみ砕いて説明してくれているのでしょう。

（問題は、これで終わりです。）